

## 巻頭言

# 看護学部紀要創刊に寄せて

学部長 中泉明彦

創価大学看護学部紀要の創刊を大変に喜ばしく思います。紀要発刊に至るまでの編集委員会、研究推進委員会のメンバーの多大なご尽力に深く感謝します。

参考になればとの思いで、私の論文作成の体験を記します。私は、医師となって3年目の1988年に大阪府立成人病センターに着任して、出版社からの上司への依頼原稿の下請けという形で初めての論文作成に取り組みました。胃潰瘍治療薬の解説という内容で、病院の図書館で文献を読んでまとめました。上司に提出したところ、上司は自らが行った多くの動物実験の結果を引用され、私の書いた部分はほとんど削除されてしまいました。そのときは自分のふがいなさを強く感じましたが、今思えば、多くの文献を読んでまとめる良い訓練となりました。初めての欧文論文は、超音波下穿刺によって採取した細胞の所見で肝海綿状血管腫を診断するという論文で、上司から臨床データをまとめるよう指示され、データを提出すると数週間後に上司の書かれた手書きの論文を手渡されました。それを私がタイプライターで打って、native speaker に英語を直してもらい、投稿し、査読されて返ってきた論文を訂正して再投稿するという手続きを一から教えて頂きました。この論文は1990年初頭にGastrointestinal Radiologyに掲載され、欧文雑誌に掲載される喜びを初めて経験しました。その後は自分で書いて上司に直してもらいながら、年に1編程度、欧文雑誌に掲載されるようになりました。このように上司から手取り足取り論文作成を訓練されて、今の自分があることを思い出し、改めて感謝の念が湧きあがっています。

以下は査読に関する話題です。博士論文の研究テーマを継続発展させることで、膵液細胞診で膵上皮内癌を診断したデータをまとめました。根治可能な膵癌の診断という意味で、インパクトのあるデータでしたので、New England Journal of Medicineに1994年初頭に投稿しました。しかし、投稿後半年くらい査読結果の知らせが無く、督促してやっとrejectの返事がきました。理由は、本雑誌には内容がそぐわないというものでした。非常に不親切で高飛車な対応だなと思いました。同論文は結局Cancerに再投稿し1995年9月掲載されました。私は、Journal of Gastroenterology(日本消化器病学会欧文誌)、日本消化器内視鏡学会誌、日本膵臓学会誌、日本臨床細胞学会誌などへの投稿論文の査読をしてきました。前述のような経験から、極力rejectとはせず、改善点を示して再投稿を促すようにしていますが、投稿論文の完成度が低く、誤字脱字、スペルミス、図と本文の内容の不一致など、投稿する前にもっと複数の目で推敲を重ねてほしいものだと思うことが時々あります。再投稿の際も、査読者としてのこちらの質問や指示に誠実に応えず、変更もしない論文も見受けられます。共同著者が十分に目を通していない、後輩の訓練を十分にしていないことなどが課題だと考えています。

本学部の紀要が、論文の書き方を訓練する場所、論文掲載の喜びを知る最初のステップとなることを願っています。今後さらに創価大学看護学部の力を結集して本学部らしいユニークな研究発信ができる紀要に育てていくことを夢見て、巻頭言といたします。